

ア ト リ エ 訪 問

第 21 回

鈴木マサル

テキスタイルデザイナー

鮮やかな配色、インパクトのある大胆な構図、
愛らしいさまざまなモチーフ。鈴木マサルのデザインするテキスタイルは、
広げると空間がパッと華やぎ、見る人の気分を高揚させる。
暮らしを彩る独特のテキスタイルは、どのように生み出されるのだろう。
その創作の裏側取材した。

撮影 永野雅子



渋谷駅前の^{けんそう}喧噪を離れ、西に少し歩くと、風情豊かな街並みが広がった。渋谷区円山町。細い路地を抜け、^{まるやま}緩やかな坂を上った先に、鈴木さんの仕事場はあった。内装は白で統一され、色鮮やかなテキスタイルのサンプルが映えていた。

——通りに面した大きな窓が気持ちいいですね。

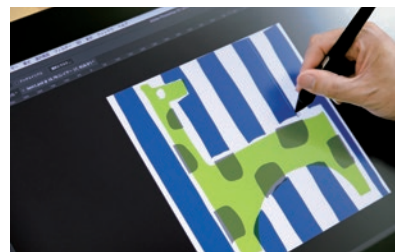
鈴木 改装に合わせて、無理を言って窓枠を木製にしてもらったんです。デザインを考えると、壁や窓を眺めながら空想することが多いので、落ち着いた雰囲気にしたくて。

ここに事務所を構えたのは、20年近く前。円山町はかつて花街だったので、昔は芸者さんが通りを歩いたり、料亭がにぎわっていたり、そういった光景を見かけることもありました。今は料亭がおしゃれなカフェになっていたりして、変化を感じられるところが気に入っています。——デジタル端末(ペンタブレット)が置いてありますね。

鈴木 今はデジタルと手描きの両方を行き来しながらデザインしています。筆で輪郭を描いてスキャンして、



雨でも気分が晴れやかになる色鮮やかな傘。



ペンタブレットを使った着色。よどみなく、すらすらとペンを滑らせていく。



手描きの下絵。
「デジタルでできる仕事が増えても、手描きのアナログ感を大切にしたい」。

着色はデジタルで、とかですね。筆のかすれやにじみなど、手描きでないと出せない質感はやはり多いです。

テキスタイルは、手仕事との親和性が高い分野だと思うんです。将来的には、すべての紙媒体がデジタルに置き換わるってことはあり得るかもしれませんが、50年後も100年後も、人はテキスタイルを着て、テキスタイルにくるまっているんじゃないかな。常に人とともにいる素材なので、手描きのアナログ感を大事にしたいという思いはあります。——下絵の段階から配色はイメージされているのでしょうか。

鈴木 最初から明度と彩度のイメージはありますね。テキスタイル製品はだいたい色違いも作るので、極端な言い方をしてしまえば、色が赤でも青でも、色相は何でもよかったりします。大事なのは、色の明るさと鮮やかさ。

僕は、色は「役割」だと思っています。気分を盛り上げたい製品を作るときは鮮やかで派手な色を使うし、リラックスしたい製品を作るときは落ち着いた淡い色を使う。それぞれに「役割」を与えてあげるような感覚で色をつけています。

——使うシーンによって、色を使い分けるんですね。

鈴木 ただ、もともと色を使うのは^{あわつじひろし}苦手だったんです。栗辻博^(※1)先生

の事務所で働いていた頃、先輩たちが微妙な色合いの違いでどれを使うかの「色決め」をしているのに、僕にはすべて同じ色にしか見えなくて。それで危機感を抱いて、色を意識して勉強するようになりました。

栗辻先生によく言われたのは、色がきれいだと思った印刷物などを至る所に貼っておくこと。色感がいい人って、普段から美しい色を多く見ている人のことだと思います。そして可能なら液晶越しではなく、実際に対象を見たほうがいい。そのほうが得られる情報が何倍にもなります。——中学校教科書『美術 1』(P.43)には「富山もよう」^(※2)を掲載しています。この作品に込めた思いを聞かせてください。

鈴木 これは「富山県民が富山の魅力を再発見する」というコンセプトで制作しました。実際に富山の名所を案内していただいて、モチーフごとに色のイメージを考えました。

当初は模様を印刷した新聞紙を配るという企画から始まり、その後、さまざまなグッズに展開されました。今も不定期で新しい模様を発表し続けているので、これからも楽しみにしていてください。

※1 栗辻博(1929-1995)
テキスタイルデザイナー。鮮やかな色彩と大胆な構図で、日本のテキスタイルデザインの革新と発展に貢献した。

※2 「富山もよう」公式サイト
<https://toyamamoyou.jp/>

「五十年後も
百年後も、人は
テキスタイルを着て、
テキスタイルに
くるまっ
て
いるんじゃないかな。」



すずき・まさる
1968年千葉県生まれ。多摩美術大学染織デザイン科卒業後、栗辻博デザイン室に勤務。95年に独立し、2002年に有限会社ウンピアットを設立。04年からファブリックブランド「OTTAI PNU」を主宰。自身のブランドのほか、10年よりフィンランドの老舗ブランド「マリメッコ」のデザインを手がける。そのほか国内外のさまざまなメーカー、ブランドのプロジェクトに参画。東京造形大学造形学部デザイン学科教授。